

十九世紀末から二十世紀初頭における ラブ・ロマンスとしてのミイラ・フィクション

金 崎 茂 樹[†]

Unveiling Mummy Fiction: Mummy Brides in Late Victorian and Edwardian Literature

KANASAKI Shigeki

No other period has seen more popularity of mummy fiction than the late Victorian and Edwardian era. What is remarkable is that quite a few mummy stories are set in the love romance genre. This is especially the case with works published from the 1880s to 1910s, when British political and imperial power prevailed in Egypt. The stories feature a male character falling in love with a perfectly preserved and fascinating female mummy. In other words, unlike current images of decaying grotesque mummies seeking revenge against those who disturbed their tombs, some mummies in fiction at the turn of the twentieth century were considered as beloved brides in both the literal and metaphorical sense. This paper examines these “mummy brides” motifs found in several works of the period and consider their characteristics.

キーワード：ミイラ・フィクション (mummy fiction / mummy stories / mummies in literature), ラブ・ロマンス (love romance), 十九～二十世紀転換期の文学 (fin-de-siècle / turn-of-the century literature), ゴシック文学 (gothic / horror fiction)

[†] 大阪産業大学 国際学部国際学科 准教授

草 稿 提 出 日 6月20日

最 終 原 稿 提 出 日 8月11日

本稿の関心はミイラを題材にした小説にある。なかでもイギリスがエジプトを保護国化していた時期は、後述のとおり、一般的なイメージとして流通している「復讐するミイラ」と異なった美しい女性ミイラが多く登場する。本稿はとりわけ女性ミイラとのラブ・ロマンスを扱った作品を中心に取り上げて、女性ミイラ・男性主人公・世界観などの分析を試みた。論の性格上、有名作品ひとつを詳しく検討するというより、マイナーなものも含む十編以上のテキストの言及や紹介をしながらその都度見出されたテーマを吟味し、そのテーマに関連する別作品を引き寄せてくるといった累積的な体裁をとっている。そのため論旨が見えにくくなっている恐れがあるので、その弊をいくらかでも救うために以下におおまかな流れを記しておく。まず予備的な考察として、十九～二十世紀転換期のミイラ受容に関する歴史的背景を見たのち、初期のミイラ作品に関していくつか略述した。そのうち、女性ミイラの登場するテオフィル・ゴーチエの「ミイラの足」を手がかりに、後続作品に進みながら、「おとぎ話」「時間とエジプト問題」「視線」などのテーマについて順次瞥見し、最後に当時の人々にとってどのような魅力が恋愛対象としての女性ミイラにあったのかを論じた。

史実としてのエジプト熱・ミイラ熱

フィクションに目を向ける前に、その背景を数人の研究者の記述を参照しながら探ってみたい。マクファーレンたちによると、ヨーロッパによるミイラ熱はギリシャの古文書まで遡り、初期の科学や医学との関わりから続いていた。早くも十二世紀にはミイラは薬に、またその粉末は顔料や庭の肥料にも使用されてきた (Day 2006, p.24-5, Frost 2008, p.ix, Macfarlane 2010, p.9 傍注7)。これは専らモノとしてのミイラの実用的価値だとみなすことができるが、そういう意味での極めつけは『トム・ソーヤ』の作者マーク・トウェインによる『地中海遊覧記 (*The Innocents Abroad*)』(1872)でのまことしやかな以下のエジプトの記述だろう。

この国の鉄道についても、ほかの国の鉄道と同じなので、あえて触れる気はない——ただ、ここで機関車に使われる燃料がトン単位、墓地単位で買われた三千年まえのミイラだということは言っておきたい。(トウェイン 1997, p.388)

こうした実用性はさておき、ミイラの考古学的・美学的な価値が俄然高まるのは、やはり一七九八年のナポレオンによるエジプト遠征によってである。その際に二千人もの芸術

十九世紀末から二十世紀初頭におけるラブ・ロマンスとしてのミイラ・フィクション（金崎茂樹）

家・植物学者・言語学者・歴史家が謎に満ちて不可知とされていたこの地に詰めかけた。その成果は約九百の銅版画と三千以上の素描が収められた二十一巻に及ぶ『エジプト誌 (*Description de l'Égypte*)』(1809-28) に結実されている (Frost 2008, pp.ix-x)。

ちなみに当時ロンドンのピカデリーで人気を博した、その名も「エジプト館 (Egyptian Hall)」で親しまれた博物館・興行館があったが、その愛称は建造物のファサードにイシス神とオシリス神、スフィンクスの像があったため、特にエジプトに限定された展示品を常設——ベルツォーニ (Giovanni Belzoni) による成功した特別展はあったが——していたためではない (詳しくはオールティック1990, pp.187-228, Luckhurst 2012, pp.90-7)。

それよりも、民衆レベルでは一八三〇年代から四〇年代のミイラの脱衣見物の流行があり、ミイラの解剖ショーは個人宅で行われていたり、公開の娯楽として供された。その流行も世紀末には影をひそめ、スペクタクルとしてのミイラは博物館に限定される一方で (Daly 1994, p.25), 世紀半ばには旅行客が墳墓へ殺到し、ミイラは最もエジプト的な土産品として望まれるものとなる。文学関係では例えば、ギュスターヴ・フロベールも一八五一年にミイラの足を持ち帰り、クロワッセ村の自宅の机上に死ぬまで置いていたという (Macfarlane 2010, p.9)。

そして、ミイラ・フィクションにとって最重要な局面を迎えるのが一八六九年のスエズ運河の開通である。運河の開通はエジプトの政治・経済面で大きな方向転換をする端緒となった。英国にとって重要な役割を果たしていたインドへの道が開かれ、四週間とこれまでの旅程期間が半減することになるからである。財政的に逼迫していたエジプト副王^{ヘディヴ} (オスマン帝国エジプト総督) が英国首相ベンジャミン・ Дизレイリへ運河株を売却したこともイギリスのエジプト進出にとって追い風となった。ついには民族主義者アラビー・パシャの乱 (1881) に介入することで、イギリスは一八八二年から一九一四年までエジプトを非公式ながらも占領下に置くことになる (Bulfin 2011, pp.413-4, Deane 2008, p.384)。このような帝国主義的コンテクストも、ミイラ・フィクションを分析する上で欠かせないものとなっている。

最後に有名なハワード・カーターによるツタンカーメン王墓の発掘 (1922) と「ファラオの呪い」の顛末があり、エジプトブームが再燃するが、これについては後ほど少しだけ触れたい。

初期ミイラ・フィクション

次にいよいよフィクションへ目を向けてみると、デイリーの報告ではエジプトを保護国として扱った時期とほぼ重なる一八八〇年から一九一四年まで一ダース以上のミイラ物

語が登場した (Daly 1994, p.24) とする一方、ブルフィンは近年のデジタル・アーカイヴを参照すればおそらく百編以上出版されていたのではないかと推測している (Bulfin 2011, p.418)。いずれにしてもミイラであふれていたのはこの時期であり、本稿が取り上げる作品もこの期間に執筆されたものが多い。

とはいえ、それ以前にもミイラが登場した作品はもちろんあった。初期のなかで最も大部となるジェイン・ラウドン (Jane Loudon) の三巻本『ミイラ! 二十二世紀の物語 (*The Mummy!: a Tale of the Twenty-Second Century*)』(1827) は、時代を遠く二一二六年に設定し、例えばボトルサイズに収縮できる乗船用気球 (Loudon 2015, vol.1, p.211) や動く家 (同, vol.1, p.165, vol.3, p.51), 自動機械の裁判官 (同, vol.3, p.142) などのスチームパンク的なガジェットにも注目されるが、復活させられたケオプス王 (クフ王のギリシア名) によってイギリス市民が恐怖に襲われパニックに陥ったり、女王の後継者争いや近隣諸国との戦争にミイラの邪悪な陰謀がからむ展開となってスケールも大きく、現実のイギリス帝国主義への先見もある。ただしその眼光鋭く見る者の心胆を寒からしめる巨躯のミイラも、その異貌の具体的な描写は乏しく、ヴィジュアル面で不明瞭のままであるのが惜しまれる。

幻想文学の雄、エドガー・アラン・ポーの短編「ミイラとの論争 (“Some Words with a Mummy”）」(1845) は、当時流行していたミイラ脱衣ショーに加えてラウドン作と同様にミイラ再生のテーマも扱う。しかし例えば再生されたアラミスタケオという名のミイラは、くしゃみをした後に鼻に電気を流すという無礼な振る舞いをした医師を殴りつけて文句を滔々と述べてみたり (Poe 1984, p.810), 新旧の文明の優劣をめぐる論争を展開するあたり、本作の持ち味は滑稽と諧謔である。それよりも、同じ作家による「ヴァルドマー氏の病症の真相 (“The Facts in the Case of M. Valdemar”）」(1845) と並べてみた時、その対比的な展開が興味深い。こちらは臨終の人間に催眠術を施したのちに死後の様子を語らせるのだが、死んだ人間が「死んだんだ」と生きている人間のみ許される叫びという論理矛盾的な行為をするや即座に腐っていく (同, pp.841-2)。生から死というこの順序とは逆に「ミイラとの論争」では死から生へと蘇ったミイラは語りから置き去りにされたまま締めくくられる。つまりここには「腐敗・消失のテーマ」が不在であり、数多くのミイラ・フィクションとは一線を画している。

その意味でポーは例外的といえようが、時間的に先行した英語圏文学ではないものの、フランス人テオフィル・ゴーチエ (Théophile Gautier) の「ミイラの足 (“Le Pied de Momie”）」(1840) は後続するミイラ物語の系譜にとって重要な作品である。以下これについて述べてみたい。

一つの系譜として

干からびたゾンビのような男が墳墓を荒らした者を襲う、現代人が抱く一般的なミイラのイメージはおよそこのようなものであろう。これは先述したツタンカーメン王墓の発掘と「ファラオの呪い」以後に制作されたユニバーサルやハマー・フィルムなどによる一連の映画の影響であり、デイの分類（Day 2006, p.8）だとクラシック期（一九三一年から七一年）にあたるが、より以前のプレ・クラシック期（一八〇〇年あたりから一九三一年）には、そのような「復讐するミイラ」ではないものも数多くあった。その先駆的な作品がゴーチエの「ミイラの足」である。

「ミイラの足」では、語り手が冷やかし程度の気持でパリのとある骨董屋に入り、文鎮の代用となるものを物色し始め「可愛い一本の足」（ゴーチエ 1975, p.269）を手に入れる。それはヘルモンティス姫のミイラの足だという。「ファラオの愛嬢ヘルモンティス姫の身体の一部をわがものにしていう、言語に絶した特権」（同, p.273）にご満悦で酩酊しながら、その夜に夢うつつのまま目を向けるとミイラの足が「まるであわてふためいた蛙のように、原稿紙のうえで跳んだりはねたりしてさわいでいた」（同, p.275）。恐怖を覚えるものの、カーテン越しから足首の持ち主の姫が現れ、語り手は無償で足を差し出す。喜ぶ姫は文鎮代わりに胸元を飾ってあった小像を原稿紙のうえに置き、二人は父王に謁見する。語り手は褒美に姫を所望するが三千年もの年齢差を理由に断られる。父王に手を握られたその痛みに目を覚ますと、ミイラがあった場所には緑色の小像が置かれていた。

この夢物語には、土産物を愛玩した前述のフロベールの実話エピソードを彷彿とさせる「商品」としての側面や、何十世紀も隔てた時間など、いくつかのモチーフが散りばめられているが、なかでも最も重要な点はミイラが女性であり、恋愛や結婚といった展開につながっていくことにある。ディーンによると、ヴィクトリア朝・エドワード朝のフィクションに登場する典型的なミイラは、若くて美しく完璧に保存された女性で、男性はミイラから逃げるよりは結婚を望み、呪いよりもキスされるチャンスを伺う。つまりこの時代のミイラ物語はラブ・ストーリーだという（Deane 2008, p.384）。これに異を唱えているのがブルフィンで、敵意しか持たない女性ミイラの物語も相当程度あり、数でいえば「呪い」の方が「ロマンス」タイプよりおよそ二対一の割合で多いと算出している（Bulfin 2011, p.420）。ブルフィンを尊重するにしても、この時期ほどラブ・ロマンスと結合した物語が量産されたことはなく、作品の多くに性差が色濃く刻まれていることがその特徴であることは間違いないこともあり、本稿は現代人にとって馴染みの薄いラブ・ストーリーとしてのミイラ・フィクションを中心に考察することは意義があると考えている。以下いくつかとりあげ比較してみたい。

グラント・アレン作の女性ミイラ

グラント・アレン (Grant Allen) 「ミイラとの大晦日 (“My New Year’s Eve Among the Mummies”）」(1880) は、ゴーチエの「ミイラの足」と類似した小品でざっと次のような展開である。

婚約者とエジプト旅行中の「私」は、ピラミッド内部でエジプト第一八王朝トトメス王による宴に出くわす。「私」は尋問されるものの、王へ直接に答申するという慣例のない素行に、高貴な血筋だと勘違いされ宴に加わることが許される。王たちは六千年前にミイラとなり千年に一度、身体が復活し宴をするのだという。王による質問責めの後、ハターソー王女との語らいが進むうちに王女への思いが募り婚約者のことも忘れて胸中を告げるが、今宵はわずか三時間残すのみとの返答に落胆する。一緒にミイラになるように勧められ、防腐保存処置が施されるなか眠ってしまうが、目覚めてみるとカイロのホテルのベッドであった。ピラミッド内で胸から血を流しマラリア熱にかかって倒れているところを救出されたのである。ポケットには施術の際に受け取った王女の指輪が残っていた。

当代の男性が時空を超えてファラオの一団に試されるという点、王女への恋愛感情、夢落ち的な結末と忘れ形見を残しているところなど、「ミイラの足」と酷似しているところが多い。ゴーチエ作品では美女を登場させるのに夢の世界という設定を利用してしたが、アレンの場合はすでにミイラが復活した現場に居合すことで「ミイラ＝死体」への恐怖を減殺しているため、どちらもどこかおとぎ話めいている。事実、ゴーチエ作品ではミイラの足をガラスの靴に置き換えればシンデレラに通じるところがあるし、ドブソン (Dobson 2017) のように、他の作品での棺に横たわる美女からは「眠れる森の美女 (“Sleeping Beauty”）」や「白雪姫 (“Snow White”）」との関連を中心に考察しているのもうなずける。

おとぎ話との関連

おとぎ話と異なるところは結末部で、ミイラ・フィクションの場合はハッピー・エンドではなく悲恋の結末となっている。ドブソンはこの対比のうちに、女性の身体を所有しようとする男性と、東洋、特にエジプトを要求する英国との間に平行関係を見出し、「眠れる美女」としてエジプトを物象化しながらも、最後に「ハッピー・エンド」の否定によって示そうとするのは、エジプトとその遺物を占有する英国の試みの無謀さであり (Dobson 2017, p.20), エジプトが大英帝国との同化に抗うように、モノとして所有されることに抵抗するとしている (同, p.31)。一理あるだろう。

同時に、いつの出来事かわからないおとぎ話の非歴史性ではなく、夢またはそれに似た設定で幻想化されているとはいえ同時代の現実的な男性が登場するのであるから、お約束

の「いつまでも幸せに暮らしました (“they lived happily ever after”）」という結末では地に足ついた作品とはならないとの物語上の要請もある。むしろ女性ミイラならびにエジプトが非歴史化・非時間化されているほうが問われなくてはならないだろうが、一方で、「近東を性的に従属的な女性として表したオリエンタリスト」(Day 2006, p.30)の視線をなぞるかのように、ゴーチエとアレンのどちらの王女もその高貴な出自からすれば身分違いともいえる主人公の想いに寄り添っている。あからさまに拒否はしないのだ。念のため付け加えておくと、ここでいうオリエンタリストとは東洋人ではなく西洋側の人間を指す。サイドによれば「社会のなかで、オリエントを同胞にむかって解釈してやる役割をになった専門家のこと」で「いつもオリエントの外側に立ちつづけ」、その距離感ゆえに「奥深さとか神秘性、性的な期待感といった比喩」、『東洋の花嫁のヴェール』とか『神秘的なオリエント』といった表現」が流通されることになる(サイド 1986, p.227)。女性ミイラの造型については以上の観点も留意しておく必要があるだろう。

ハガード作の女性ミイラ

上記作品に限らずミイラのラブ・ロマンスはまだある。自身エジプト学者でもあるヘンリー・ライダー・ハガード(Henry Rider Haggard)は、アフリカ奥地のコール族の不死の女王アッシャを「死衣に身を包んだ屍体を思わせ」る「ミイラのような姿」(Haggard 1998, p.132)で登場させながら、やはり恋人に再会を誓って死んでいく秘境探検小説『洞窟の女王(*She*)』(1887)を執筆した。ハガードといえば本作や『ソロモン王の洞窟』だが、これら代表作よりも本稿にとって無視できないのは「スミスとファラオたち (“Smith and the Pharaohs”）」(1912)である。

主人公ジェームズ・エベニーザー・スミスは大英博物館でエジプトのマ・ミー女王のレプリカ彫像を「一度、二度、三度見て、三度目で恋に落ち」(Haggard 1921, p.5)、実際にエジプトでの発掘作業で金の指輪をはめたマ・ミー女王のミイラの手を発見する。そのうち、不注意でひとり一夜を明かすことになったカイロ博物館で、恋い焦がれたマ・ミー女王も連なるエジプト諸王の集いを目撃する。例によって尋問が始まるなか、スミスは古代エジプト彫像家の分身でマ・ミー女王に不倫の恋をしていたことが判明するものの、マ・ミー女王の弁護もあって墓荒らしの科を免れる。別れ際にマ・ミー女王は未来での愛を誓いスミスと指輪を交換するが、今夜の出会いはスミスには夢だとはか思わないだろうと予言して消えていく。マ・ミー (“Ma-Mee”) という名は「ミイラ (“mummy”）」であるにとどまらず、「母 (“mommy”）」「我が恋人 (伝語の “ma mie”）」(Deane 2008, p.386, Corriou 2015, p.3) と共鳴していることから、女性は主人公の味方で庇護者であり恋人で

あることが端的に示されている。

アメリカ人作家のミイラ

ポー以後のアメリカ人作家に目を向けると、ルイーザ・メイ・オルコット (Louisa May Alcott) に、スエズ運河開通と同年の「ピラミッドに迷って (“Lost in a Pyramid, or the Mummy’s Curse”）」(1869)がある。ほぼ同時期に書かれた『若草物語 (*Little Women*)』(1868)とは打って変わって、匿名で出された本編はミイラとではなく、ミイラの遺物である植物の種がアメリカ人男女のラブ・ロマンスを妨害する結末である。最初に書かれた「ミイラの呪い」のひとつとして必ずあげられる一編ながら、本稿の文脈からは外れるので詳しくは追わない。

時代は下り、アメリカ・ルネッサンスの巨匠ナサニエル・ホーソーンの子、ジュリアン・ホーソーン (Julian Hawthorne) の「見えない男の話 (“The Unseen Man’s Story”）」(1893)は、まさにラブ・ストーリーとっていい。そこではカリグリアーノという男が次のような身の上話を語る。ある石棺の下に隠された通路を辿っていくと、「日々が瞬間、年月が時間、世紀が年月」で「息が鼻腔を行き来する間に、月は満ち欠けするかもしれない」ほど、「はなはだ緩慢でほとんど知覚できない」動きをしている人間たちを発見する (Hawthorne 2013, p.143)。自分の身にも同様の変化が起こっていることに気づきつつ、荘厳な行進の最後尾にハターソー女王が現れると、女王と秘密の恋をしていた過去の記憶を取り戻す。その昔、女王が死んでしまうと防腐処置の前にその心臓を取り出したカリグリアーノは自分の死の際に互いの心臓を入れ替えるように友人に託したのだった。女王の方は冥界で審判を受け三千五百年後に現れた者 (=カリグリアーノ) から元の心臓を受け取れば天界入りを遂げることができ、一方カリグリアーノは自身の辿るべき路を果たせば女王と永遠の愛が叶うだろうという。だがカリグリアーノは心臓摘出の恐怖に逃げ出す。それ以来後悔の念が募るばかりのところ、二十年待てば今一度機会が与えられるとの夢のお告げがあり明日がその期日だと締めくくる。それ以後カリグリアーノの姿を見たものは誰もいない。

アレンやゴーチエ、ハガードでは女性ミイラとの一夜限りの逢瀬であったのが、本作では二度目の挑戦として二十年の時間を耐えるという時間の延長がある。またスローモーション化された時間の描写は印象に残るもののわざわざ挿入する必然はそれほど感じられないことも気になる。ミイラ・フィクションは「時間」をどのように扱っているのかわかるか。

時間

これについて取り上げたい作がある。シャーロック・ホームズの生みの親コナン・ドイル (Conan Doyle) 作「トトの指輪 (“The Ring of Thoth”）」(1890) である。

閉館時間になってもルーブル美術館内でうたた寝中だったエジプト学者のジョン・ヴァンシター・スミスが盗み見たのは、館内に残っていた職員がミイラを取り出している現場であった。ミイラは「滝のように長くつややかな黒髪」(Doyle 1979, p.209) をもつ美しい女性だった。見つかったスミスはナイフで殺されそうになるが、職員は気を変えて自身の経緯を語り出す。実はこの職員はソスラという名の古代エジプト人で体内に自作の秘薬を取り入れた不死の人だった。友人には同じく不死となったパルメスがいて、二人はアトマという女性に恋するが、結婚したのはソスラの方だった。妻にも不死を勧めるものの、神を畏れるアトマはためらううちに病死してしまう。死なせたことを難じるパルメスは秘薬を無効にする方法を見つけ、先にアトマの元へ旅立ってしまう。死の方法を知らないソスラは現代までの長い歴史を生き続け、ようやく今宵その鍵となるトトの指輪を見つけることができ、自らの命を絶ちアトマのミイラと添い遂げるのだという。美術館から締め出されたスミスは、「引き離すには至難なほどかたく」(同, p.222) ミイラを腕に抱いたソスラの死を新聞記事で読む。

ジョージ・グリフィス (George Griffith) の類似作品「失われた霊薬 (“The Lost Elixir”）」(1903) も、「イシスの涙」と呼ばれる液体で不死となった恋人ふたりが、恋敵の無効薬のため自分だけが現代まで生かされてしまう。三千年たった現代でも「ほんの一時間前に眠った」かのように美しい恋人へ口づけをするや「ミイラの白い肉体が黒くなってしわくちゃに縮み」、自身は骨と化しながらも恋人の棺に「崩れながら進んで」「ようやくのこと、別れて久しい恋人たちの灰塵が交じり合うことが許された」(Griffith 2018, p.152)。「トトの指輪」にしても「失われた霊薬」にしても「さまよえるユダヤ人」と同工の不死の苦しみのテーマを取り入れることで、「見えない男の話」以上の時間を男性に課している。ガイ・ブースビー (Guy Boothby) の「エジプト学の教授 (“A Professor of Egyptology”）」(1894) も事情は同じで、裏切られたと誤解した弟王子による兄王子の恋人殺害のため、教授の姿となった今でも責苦を背負ったままである。

とりわけ「トトの指輪」では、夢や幻視で曖昧化された異空間ではなく美術館という現実の場にも言わぬ美女を横たえ、その完璧な保存それ自体が悠久の時間を誘発することにもなっており、時間の神秘性がいっそう先鋭化されている。ディーン論考は時間を結婚とからめてミイラ・フィクションと同時代の通常の帝國的ロマンスとの違いを分析しているのだが、それによると、通常の帝國的ロマンスの場合、ヒロイックな英国男性と

フロンティアの現地女性との異種族間混交の達成も、英国女性との去勢化をとまなう結婚も排除されるのが常で、結婚は成就されない。しかしミイラ物語では結婚への期待は、それらよりもはるかに共感的に扱われている。結婚のプロットをこれほど際立たせるものは、結婚成就が一貫して先送りされる——除外ではなく無限に先送りされるからであるが、ディーンはそこに英国と保護国化していたエジプトとの関係を見る。すなわちエジプト問題が結婚という性的・政治的アレゴリーを通じて幾度となく持ち上がりこそすれ、決して解決しない (Deane 2008, p.385) ことが重要であるという。

なぜなら、一時的なものと常に考えられながら、エジプトでの英国の長引く存在は、占領完遂という問題が絶えず持ち上がりながらも解決しない、注意を要する政治ダンスに依存していて (同, p.399), 正式にエジプトを要求すればフランスとの戦争を引き起こしかねないため、エジプト総領事クローマー伯のヴェールを被せた保護国化は、異常なまでの非決定性のもとで進行せねばならなかったからである。この変化を制し時間を曖昧化する政治的要請が、ヴィクトリア朝の魅力的な女性ミイラに具現化されていて、その美しさはその永続性によって高められ、その官能的な魅力は永遠に焦らされる問題のように、完結を遅延させるストリップショーのおかげだという (同, pp.400-1)。逆説めくが、「達成不能なゴールがあるからいつまでも帝國的行動が許されるのである」 (同, p.389)。そうだとすれば、アメリカ人作家ホーソンの「見えない男の話」でのスローモーションの場面による非歴史化・非時間化は、国籍の違いにもかかわらず図らずもディーンの考察に対応した現象とみなすこともできるかもしれない。

H・D・エヴェレット (H. D. Everett) の『アイラス (*Iras: a Mystery*)』 (1896)

ディーンは、ヒロイックな英国男性が登場する帝國的ロマンス——具体的にどの作を想定しているのかは明示されないものの——とミイラ・フィクションを比較したのだが、翻ってミイラ・フィクションの男性はどうだろうか。この点について、ラブ・ロマンスのミイラ物語としておそらく真っ先に挙げられるスィーオ・ダグラス (Theo Douglas) 名義で出版された女性作家H・D・エヴェレット (H. D. Everett) の『アイラス (*Iras: a Mystery*)』 (1896) を手掛かりに考えてみたい。

エジプトで発掘調査をした経験もあるラルフ・レイブナムの元に友人からミイラが入った未開封の棺が届く。中にいるのは目を閉じたままだが穏やかに息をする若き美女でレイブナムはたちまち恋に落ちる。レイブナムは恋人に、シェイクスピアの『アントニーとクレオパトラ』に登場するクレオパトラの二人の侍女にちなんで、名を「アイラス」、姓を「チャーミアン」と名付ける (Everett 1896, p.119)。この命名行為それ自体もそうだが、シェ

イクスピア経由で英国化されている点、また姓名がプトレマイオス朝最後のファラオであるクレオパトラ自身ではなくその侍女に由来する点、はかなげなアイラスの目覚めの第一声が「閣下」や「だんな様」ともとれる“my lord”という呼びかけが含まれている（同, pp.90-1）——すぐあとにも“my master”（同, p.93）とある——ところなど、今まで以上に男性主人公は恋人を守るナイトであり保護者的な立場が強調されている。アイラスの造型も異国の女性というよりは、むしろ英国男性が理想とする従順で家庭的な自国の女性を異国に投影しているにすぎないといったほうがよい。

事実、英国男性のヒロイズムが遺憾なく発揮されることが期待されるかのように、ふたりに立ちはだかる不気味な敵役も存在している。神官サヴァクはかつてアイラスとの結婚を迫ったが、アイラスは「まだ生まれし男が、七世代の時間が経つ前に目覚めさせれば、女はその者のものとなる。目覚めることなく七世代経てば、土となり我がものとなる」（同, p.86）という条件を承諾し生きたまま封印されたのだった。七世代どころか七十世代が過ぎている今、サヴァクの追跡はレイブナムに対してもすでに始まっていた。

ところがレイブナムとサヴァクの対決はいっこうに展開されない。恋人ふたりは追跡をかわすため、また人目も憚ることもあって、合法的な結婚が認可されるスコットランドへ向かう。結婚は無事にできたものの、切迫感に追われて北へ北へと逃避行を重ねるのみである。次第にレイブナムは健康不調をきたし、アイラスも徐々に衰弱していく。護身のネックレスの宝石も数を減らしていくうちについては激しい雪嵐のなか行き倒れてしまい、レイブナムは救出され数日後に意識を取り戻すが、その現場には布で包まれ何千年も前に亡くなった女性のミイラがあったと告げられる（同, p.219）。アイラスは生きた姿で実在していたのか、それとも自身の妄想にすぎないのか、いずれか決定するには矛盾する事実があり副題にあるように未解決の謎が残るまま、余命いくばくもないレイブナムは友人にアイラスの隣に自身の亡骸を埋葬するように頼む。

男性主人公の人物造型

以上のように『アイラス』では相手の追跡に対してなすがままであり、同時代の『ドラキュラ』（1897）や「サイキック・ディテクティブ」ものと違って脅威の排除への姿勢に乏しい。『アイラス』までとはいかなくても、本稿で取り上げた男性主人公の多くは愛国主義的な英雄的資質に欠けている場合が多い。例えば「ミイラとの大晦日」の主人公は王女との別れが迫ると「まるで五歳児のように泣きじゃくり始め」（Allen 2008, p.57）、「スミスとファラオたち」のスミスは「気質的に内気で控えめ」で、はっきりとは説明されないが「若い頃に世間が与えた仕打ちとその時に受けた厳しい拒絶や手荒な待遇が傷つきや

すい心に深く沈みこんでいる」(Haggard 1921, p.4) 孤独な独身男性である。あるいは「見えない男の話」のカリグリアーノも、通過儀礼といってよい心臓摘出を前に恐怖で逃亡した。

モンタギューはこのような弱さに当時のイギリス男性の「翳り」——ボア戦争と兵役不適合者の増加、出生率の低下、性的無秩序、規範にとらわれない「新しい女性」の登場、同性愛をめぐるワイルド裁判(1895)など——をつきあわしている(Montague 2011, pp.55-6)。それとともに、エジプトとの関係に対するイギリスの罪の意識や不安を考慮に入れる必要もあるだろう。対エジプトという構図がずらされた場合にはその不安が薄れ、にわかにイギリス人が英雄的に活躍するミイラ・フィクションもあるからである。「失われた霊薬」と同じ作者ジョージ・グリフィスの『ゴールデン・スターのロマンス(*The Romance of Golden Star*)』(1897)がそれである。グリフィスは他に『ミイラとニトクリス嬢(*The Mummy and Miss Nitocris: a Phantasy of the Fourth Dimension*)』(1906)が重要であるが、これについては別に稿を改めて検討する予定である。

『ゴールデン・スターのロマンス』では、イギリスに運ばれたミイラが、生理学者ローレンス・ジャーマによる秘術によって三百六十五年の時を経て息を吹き返す。そのミイラはインカ帝国の正当な後継者であるヴィルカロヤ王子であった。王子には妹で妻になることが定められたゴールデン・スターがいて、王子は無尽蔵の財宝を報酬にゴールデン・スターも復活させるように要求する。ミイラ発見者のランソン教授、ジャーマの妹ルース(王子にはジョイフル・スターと呼ばれる)、フランシス・ハートネス大佐も一行に加わりペルーへ渡り、ゴールデン・スターも無事に命を取り戻したあと、王子一行はペルー政府の腐敗と地元民への圧政に反旗を翻した革命軍を率いて帝国を取り戻すという展開である。

注目すべきは、これまでのミイラ・フィクションと異なり二組の結婚成就で締めくくられる点である。そこではヴィルカロヤとゴールデン・スターの結婚は回避され、王子はゴールデン・スターに瓜二つのルースと、アイラスのように幼げなゴールデン・スターはハートネス大佐と結婚させることで近親婚をタブーとする近代の価値観に合わせているが、かえってミイラとの結婚が二重化されることになりイギリスとインカ帝国(というより植民地)の関係が強化される結果となる。しかも王子は自軍を「自分には不慣れな新しい技能と戦術の知識」の所有者であるハートネス大佐に託さねば成功裡に終わることはなかった。「相手が男性であろうと女性であろうと決して約束を違えることなどないイギリス人」(Griffith 1897, p.142)として賞賛され、軍事的な活躍をするハートネス大佐は帝國的ロマンスのヒーローにふさわしい。

仮にこの物語の舞台がエジプトあるいはアフリカであればこのような展開になったであ

ろうか。その場合、イギリスが敵と味方の一人二役となるのでここまではっきりした大団円になるべくもないだろう。イギリスのエジプト民への圧政を、遠く南米のスペイン系ペルー政府と現地民の关系到すり替えることによって、イギリスは傷つきも呵責もなく王子による「長きこと待ちわびた報復の日」（同、p.169）の達成を進んで援助ができるのである。このいわばネガからポジへの変換によって、イギリス男性のヒロイズムも、これまでのミイラ・フィクションでは先送りされてきた結婚も、鮮やかなまでに反転像として立ち現れる。逆にいえばラブ・ストーリーを骨子とするミイラ・フィクションにおいては、「イギリスとエジプト」の敵対構図が顕在化されるほど、男性主人公はヒロイズムから後退すると一概にいえないまでも傾向としてはいえるだろう。

見る／見られる

しかしながら、ヒロイズムとは別に、そもそもラブ・ロマンスとしてのミイラ・フィクションにもそのような対立構図は埋め込まれている。その典型は「見る／見られる」という能動・受動関係に潜む支配関係である。すでに見たように、「スミスとファラオたち」や「アイラス」のように、男性が女性を見るやすぐさま恋に落ちるというロマンス的展開は多く、他にもジャスティン・ハントリー・マッカーシー（Justin Huntly McCarthy）「ペトラス教授（“Professor Petrus”）」（1884）のように、当代随一のエジプト学者がロンドンに秘匿する女性ミイラを見た青年が、一瞬でその美しさに魅了される場面がある（McCarthy 2016, pp.101-2）。博物館が多く登場（「スミスとファラオたち」「トトの指輪」）するのもミイラが収蔵品であるから当然だが、搾取の場所、「見る／見られる」トポスとしてこれに勝るものもない。そのような眼差しに都合よくも女性ミイラも拒絶はしない。そこではミイラは第一に収蔵物・展示品であり、ゴーチエの場合は文鎮の代用として消費されるモノであった。見ることは所有することでもあり、たとえ出会いの場所がピラミッド内にしても、コリウなどが指摘しているように、考古学という学問的欲望と性的欲望は分かち難く溶け込んでいる（Corriou 2015, pp.2-5参照）。

このような行為の代償が、「ミイラの足」「ミイラとの大晦日」「スミスとファラオたち」などでのファラオたちによる男性主人公への尋問として捉えることができるだろう。そこでは男性が反転されて「見られる」側に立ち、古代の権威者たちが女性ミイラとの結婚や所有を阻む。これに関連して、上述作品よりも見ることの過剰性が自身に跳ね返ってくる悲劇がある。『ドラキュラ』の作者ブラム・ストーカーの『七つ星の宝石（*The Jewel of Seven Stars*）』（初版1903、改訂版1912）である。「大いなる実験」と題する最終章で、女王テラを復活させるために裸にしようとするが、その場に立ち会った唯一の女性マーガ

レットは「女王にとって、女性にとって、それはひどい屈辱」(Stoker 2004, p.175)と憤る。それに対して父トレローニは学術的・医学的口実のもと、「女性でない、ミイラだ」(同, p.174)と断ずることで決行する。マーガレットはテラの分身——名“Marg-ARET”にテラが順序を逆にして見出されもする(Corriou 2015, p.3)——だから、マーガレットの怒りはテラの怒りでもある。

さらにテラは屍衣ではなく花嫁衣装に身を包んでいることで恋人という側面が強調され、それすらも剥がされいっそう陵辱的に複数の男性の視線にさらされる。結局、実験は失敗し語り手マルコム・ロス以外はマーガレットも含めて全員死亡してしまう。失敗の原因がはっきりと明示されないところもあって、男性の見るという行為の報復として自らの死を招く結果となったと解釈できる余地は残されているだろう。ちなみにこの結末は当時の読者には衝撃だったようで、改訂版では実験は失敗するものの全員無事で、おそらくテラが乗り移ったマーガレットとロスの結婚に置き換えられた。

ファム・ファタールか

破滅的な力を秘めたテラはこれまで言及した女性ミイラの最右翼であろうが、アイラスやゴールデン・スターの存在は、女性ミイラを世紀末的な「宿命の女」^{ファム・ファタール}として一括りにすることを許さない。興味深いことに、エジプトのもう一つの代名詞であるスフィンクスの場合は、ギュスターブ・モローやオディロン・ルドン、フランツ・フォン・シュトゥックなどの視覚芸術家によって、ギリシアの英雄オイディプスと対峙させる怪物化した女性の図像を用意してくれたこともありファム・ファタール的な意匠は定着している。

また、ミイラとヴァンパイアとの類似を探るフライシュハックのような研究者もいるが、そこでの共通項の多くは男性ミイラである(Fleischhack 2009)。そのなかで、二十世紀への転換期におけるラブ・ロマンスとしてのミイラ・フィクションについて最も雄弁であるのはデイリーかもしれない。デイリーは消費という観点から論を展開していく。ミイラ物語流行の時期のイギリス経済は生産というより消費の時代であった。モノの過剰な氾濫が英国を逆に植民地化しているともいえ、イギリス家庭を満たすモノが実際のところ自国のものでないとしたらどうなるか。ミイラ・フィクションはこの帝国の副作用に関する新たなタイプの物語を提供し、主体と商品との新たな関係、国家経済と帝国の拡張との結合を述べるのだという(Daly 1994, p.26)。

なかでも、世紀後期の「ロマンス復興」は中期ヴィクトリア朝で優勢であった家庭的フィクションからの離脱を示しているが、ミイラ作品は家庭的フィクションに特徴的な文彩の焼き直しにすぎない(同, p.43)という指摘は重要だろう。デイリーは挙げていないが、

それを如実に物語っている作品として、『アイラス』以上に家庭化されたミイラが登場するヘンリー・A・ヘリング（Henry A. Hering）「教授二人とミイラ一体（“Two Professors and One Mummy”）」（1901）がある。アイダと名付けられたミイラ——一八六九年のスエズ運河開通を記念して作られたジョゼッペ・ヴェルディ作のオペラタイトルでもあるのだが——は、男性に従順な性格もさることながら容姿もオリエンタルなものでなく「絶対にイギリス人の顔」（Hering 2018, p.140）と出自が国内化・家庭化されている。この変更によって「対エジプト」の構図も薄れるのだから、珍しくも恋愛成就の気配で終わるのも故なしとしない。デイリーが付け加えているように、英国の拡大する商品文化がますます輸入品に依存し、国家としての主体的アイデンティティの感覚が脅かされている時に、ミイラ・フィクションは限界があるものの、商品の力が持つ幻想を楽しむ空間を提供するのである（Daly 1994, p.46）。

つまるところデイリー流に言えば、ラブ・ロマンスとしてのミイラ・フィクションは商品による消費者疎外に対する調整弁だといえる。そのため恋した者を破滅へと導くファム・ファタールではなく、多くは夢物語に似た設定で美しくも脅威までには至らない女性ミイラが誘われたのである。そうであるなら、それはいささか退行的な幻想だといわざるを得ない。そのようなミイラは今もなき古の——というよりも、いつの世にも存在しない——エジプトを象徴するものの、同時代のイスラム国家としてのエジプトが等閑視されているからである。ヴェール越しに見えるものは美しい姿だが、一方その同じヴェールで「エジプト問題」を見えにくくさせてもいるといえるだろう。「問題」が噴出するとき、ミイラの報復や呪いといったお馴染みのミイラ・フィクションとなるが、それについては別のところで考察したいと思う。

引用文献

- Alcott, Louisa May (2016). “Lost in a Pyramid, or the Mummy’s Curse.” *Lost in a Pyramid and Other Classic Mummy Stories*. Ed. Andrew Smith. London: The British Library, pp.13-27.
- Allen, Grant (aka Wilson, J. Arbuthnot) (2008). “My New Year’s Eve among the Mummies.” *Out of the Sand: Mummies, Pyramids, and Egyptology in Classic Science Fiction and Fantasy*. Ed. Chad Arment. Landisville, Pennsylvania: Coachwhip Publication, pp.47-60.
- Boothby, Guy (2008). “A Professor of Egyptology.” *Out of the Sand: Mummies, Pyramids, and Egyptology in Classic Science Fiction and Fantasy*. Ed. Chad Arment.

- Landisville, Pennsylvania: Coachwhip Publication, pp.108-24.
- Bulfin, Ailise (2011). "The Fiction of Gothic Egypt and British Imperial Paranoia: The Curse of the Suez Canal." *English Literature in Transition, 1880-1920* vol. 54, no.4 (2011), pp.411-443.
- Corriou, Nolween (2015). "'A Woman is a Woman, if She had been Dead Five Thousand Centuries!': Mummy Fiction, Imperialism and the Politics of Gender." *Miranda* vol. 11 (July 2015), pp.1-15.
- Daly, Nicholas (1994). "That Obscure Object of Desire: Victorian Commodity Culture and Fictions of the Mummy." *Novel* 28 (1994), pp.24-51.
- Day, Jasmine (2006). *The Mummy's Curse: Mummymania in the English-Speaking World*. London and New York: Routledge.
- Deane, Bradley (2008). "Mummy Fiction and the Occupation of Egypt: Imperial Striptease." *English Literature in Transition, 1880-1920* vol. 51, no.4 (2011), pp.381-410.
- Dobson, Eleanor (2017). "Sleeping Beauties: Mummies and the Fairy-Tale Genre at the *Fin de Siècle*." *Journal of International Women's Studies* vol. 18 no. 3 (February 2017), pp.19-34.
- Doyle, Arthur Conan (1970). *The Best Supernatural Tales of Arthur Conan Doyle*. Ed. and Intro. E. F. Bleiler. New York: Dover Publications, INC.
- Everett, H. D. (aka Douglas, Theo) (1896). *Iras: A Mystery*. Edinburgh and London: William Blackwood and Sons.
- Fleischhack, Maria (2009). "Vampires and Mummies in Victorian Gothic Fiction." *Inklings-Jahrbuch* vol. 27 (2009), pp.44-59.
- Frost, Brian J. (2008). *The Essential Guide to Mummy Literature*. Lanham, Maryland and Toronto and Plymouth, UK: The Scarecrow Press, INC.
- Griffith, George (1897). *The Romance of Golden Star*. London: F. V. White & CO.
- (2009). *The Mummy and Miss Nitocris: a Phantasy of the Fourth Dimension*. World Library Classics.
- (2018). "The Lost Elixir." *A Mummy Omnibus: 1820s-1920s*. Ed. John P. Irish. Bridgeport, Texas: A Bit of Irish Press, pp.141-52.
- Haggard, H. Rider (1921). *Smith and the Pharos and Other Tales*. New York: Longmans, Green & Co.

- (1998). *She*. Ed. and Intro. Daniel Karlin. Oxford and New York: Oxford UP.
- Hawthorne, Julian (2013). “The Unseen Man’s Story.” *Unearthed*. Ed. John J. Johnston and Jared Shurin. London: Jurassic, pp.131-148.
- Hering, Henry A. (2018). “Two Professors and One Mummy.” *A Mummy Omnibus: 1820s-1920s*. Ed. John P. Irish. Bridgeport, Texas: A Bit of Irish Press, pp.133-40.
- Loudon, Jane (aka Webb, Jane) (2015). *The Mummy!: a Tale of the Twenty-Second Century*. 3 vols. London: Forgotten Books. (reprint of S. and R. Bentley, 1827)
- Luckhurst, Roger (2012). *The Mummy’s Curse: the True History of a Dark Fantasy*. Oxford: Oxford UP.
- Macfarlane, Karen E. (2010). “Mummy Knows Best: Knowledge and the Unknowable in Turn of the Century Mummy Fiction.” *Horror Studies* vol.1 no.1 (1 January 2010), pp.5-24.
- McCarthy, Justin Huntly (2016). “Professor Petrus.” *Lost in a Pyramid and Other Classic Mummy Stories*. Ed. Andrew Smith. London: The British Library. pp.77-106.
- Montague, Murry Buford (2011). *Science, the Occult, and the Conservative Project of Late Victorian and Edwardian British Mummy Fiction*. Diss. Ball State U. (Submitted in fulfillment of the requirements of the degree of Doctor of Philosophy. July 2011).
- Poe, Edgar Allan (1984). *Edgar Allan Poe: Poetry and Tales*. Ed. Patrick F. Quinn. New York: The Library of America, pp.805-21.
- Stoker, Bram (2004). “The Jewel of Seven Stars.” *Return from the Dead: a Collection of Classic Mummy Stories*. Selected and Intro. David Stuart Davis. Hertfordshire: Wordsworth Edition.
- オールティック, R・D (1990) (小池滋監訳) 『ロンドンの見世物 Ⅱ』国書刊行会
- ゴーチエ, テオフィル (1975) (田辺貞之助訳) 「ミイラの足」『世界幻想文学大系7 ミイラ物語』国書刊行会 pp.265-285.
- サイード, エドワード・W (1986) (板垣雄三・杉田英明監修 今沢紀子訳) 『オリエンタリズム』平凡社
- トウェイン, マーク (1997) (吉岡栄一他訳) 『マーク・トウェインコレクション 10B 地中海遊覧記 下』彩流社